カトリック大阪教会管区 部落差別人権活動センターたより

夏号
16年7月
NO.44

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町通三条上ル カトリック会館7F
編集人／吉岡秀紀
TEL&FAX 075-223-2291 E-mail:cat-bukatucenter@kde.biglobe.ne.jp
Home Page http://www7b.biglobe.ne.jp/~bukatucenter/

「いつくしみの特別聖年」におけるハンセン病問題
慈善のわざについてじっくり考えるために

カトリック相模原教会司祭　浜崎　眞実

今年の6月10日から11日、バチカンでハンセン病についての国際会議が開かれました。タイトルは「ハンセン病患者の尊厳を尊重した全人的ケア（*Holistic Care for People with Hansen's Disease which Respects their Dignity*）」です。この会議は日本財団などと共催とのこと。かつての「救らい」活動の象徴でもある皇室を未だに称え、莫大な財力をもとに様々な分野で慈善事業を展開しているのが日本財団です。昨今どこの街でも日本財団のロゴマークがついている福祉関係の自動車を見ないことはないくらいに日常化し浸透しています。そんななかで「いつくしみの特別聖年」も日本財団の慈善活動と手を結ぶと、ナザレのイエスとは関係のないものになるのではないかと危惧します。幸いにも教皇フランシスコは「慈善活動に邁進せよ」とは言わずに「わたしの心からの願いは、この大聖年の間にキリスト者が、身体的な慈善のわざと精神的な慈善のわざについてじっくりと考えてくださることです」（大勅書『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』15項）と呼びかけています。すなわち慈善活動について立ち止まって考え見直すようにとの提案です。それに応えるためにも、日本でのハンセン病問題から学ぶことは多く時宜にかなっていると思います。以下日本におけるハンセン病問題、特に「ハンセン病国賠訴訟」（正式名称は「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」）を通して出会った当事者から学んだことを記してみます。今年は国賠訴訟の判決から15年、「らい予防法」廃止から20年の節目の年でもあります。

「いつくしみ」ということば

「いつくしみの特別聖年」で「いつくしみ（misericordia）」が強調されています。＜misericordia＞はかつて「憐れみ」と訳されていました。それよりはいいのかもしれませんが「いつくしみ」と訳しても上から目線で、「弱い者を保護して助けてあげる」とのパターナリズム（弱者保護に名を借りた権力行使）の臭いを感じます。しかし、ヘブライ語では内臓とか母親の子宮を表す＜ラハミーム[＜レヘム＞の複数形]＞と契約関係を表すことばの一つで＜ヘセド＞にたどり着きます。＜ラハミーム＞の流れでは新約になると＜スプランクニゾマイ＞という特別なギリシャ語があり、それは「はらわたが動かされる思い」との意味になります。強い立場にいる人が弱くかわいそうな人に同情するのとは異なります。意図することなく自らの計画の枠を突き破っ

て思いがけなく行動を起こす原動力のように描かれています(「その人を見てはらわたが動かされ、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をした」ルカ10：33－34)。

もう一つの＜ヘセド＞は、力とか情動的力という意味領域にあります。「契約関係に忠実であろうとする力」とか「他者とともに連帯的に生きていこうとする力」との説明がなされます。聖書の民、ヘブライという社会層に由来する古代イスラエルの民はいのちの神（YHWH）との関係を「契約」で表し、それによってその時代の荒ぶる神や魔術の世界を突破しました。人と人とが支配されたり支配したりする関係ではない対等に生きていける社会を提示したのです。そのような関係性の社会を築いていく土台になる契約関係用語の一つが＜ヘセド＞です。そこでは人間による人間の支配という関係を「いのちの神との契約」という発想で乗り越え、人と人とが対等で互いに尊重しあえる関係を目指します。その契約内容に対していのちの神の側からの忠実さであり、その忠実さに信頼して生きようとする民の姿勢をも表します。荒ぶる神に貢ぎ物を捧げてなだめて生きるのでも、強い者におもねって憐れみの対象として自らを卑下し媚びを売ることでもないのです。

「聖年」の起源はレビ記25章にある「ヨベルの年」です。それと重ね合わせるなら、＜ヘセド＞によって共に生きていく土台と方向性が示され、＜ラハミーム＞によってそこに向かって内的に促されていくということでしょう。そうであれば「いつくしみの特別聖年」は個人の救いを中心テーマにするのではないはずです。「ヨベルの年」に借金の帳消しや奴隷状態に陥れられた人が自由になる「解放のプログラム」が設定されているのは、社会の弾力性とか懐の深さを表すためだからです。そこでは個人の善意に依存するのではなく、社会のあり方が問われているのです。

「開かれた教会をめざして」の先に

「わが国においては、ハンセン病が極めて特殊な病気として取り扱われたために、自分の世俗的な幸せよりも悲惨な患者のために奉仕することに無上の喜びを見出す人々だけが関わる病気となってしまいました。その結果、一見非常に美しい世界に見えながら、実情は異常な世界だったように思います。そうした中で正論が通らなくなり、患者の取り扱いは非常に過酷なものになってしまいました。一種の狂気が支配した世界だったと言ったら言い過ぎでしょうか」（和泉眞藏氏の弁護団への返書：皓星社ブックレット・10『証人調書②「らい予防法国賠訴訟」和泉眞藏証言』2001年皓星社７頁）

社会的弱者、「やっかい者」と思われている人や問題をかかえている人たちに対して「憐れみ」の対象として「寛容に」開かれた教会の名で「受容」することは悪いことではありません。1987年に「開かれた教会をめざして」とのテーマで第一回福音宣教推進全国会議（NICE1）が開催されました。その効果なのか、現在多くの教会がAAなど依存症の自助グループの集会に使用されるようになっています。それ以外にも地域社会に場所を提供している教会も少なくはないでしょう。しかしそこがゴールではないはずです。「寛容さ」と「善意」によって他者を「受容する」姿勢には差別や偏見が隠れている場合があるからです。わたしの場合、そのことに気づかされ関心をもつようになったのはハンセン病国賠訴訟の原告たちとの出会いでした。そこで差別的な社会の中で大衆に「受容」してもらうことがハンセン病とともに生きてきた人たちの

本当の願いではないことを知らされたからです。1998年に提訴して2001年に原告勝訴の判決をもたらした「ハンセン病国賠訴訟」において、原告の主張は「困っているから助けてほしい」というものではありませんでした。

第一次原告13名の一人、竪山勲さんは国賠訴訟係争中の1999年1月に「日本の国が好きだから」とのタイトルで裁判の意義を「人間裁判ネットワーク」という支援の会に宛てて綴っています。そこには「私は日本が大好きです。大好きな日本であるから、国を相手にした裁判を行っています。その大好きな日本であっても、偏見や差別がたくさんあります。私たち45名（第三次提訴まで）の原告団は、人権の回復をめざし、「らい予防法」違憲国賠訴訟を熊本地裁に提起しました。それは、「らい予防法」によって引き起こされた人権侵害の実態を広く世に問う裁判です。…略…私たちはこの裁判を通し、日本の国が侵した過ちを明確にし、ふたたびこのような歴史を繰り返さない！そんな願いを込めた国家諫暁（諫言暁諭）だと思っています。」と記されていました。

また東日本訴訟の原告であった西村時夫さんは2004年8月に国立駿河療養所で開かれた「ハンセン病問題に関する検証会議」での聞き取り証言が遺言のようになり、その秋に亡くなりました。そこでは「まもなく私たちはこの世からいなくなります。私たちがいなくなった時、ハンセン病に対する偏見と差別だけが残ってしまうことがないように。『もう今はハンセン病患者はいないけど、あの病気は恐い病気だった』という残り方だけは、絶対して欲しくない」と語っていました。このような声に応えるには、社会の中に未だに温存されているハンセン病に対する差別とその構造に向き合いそれを無くすことでしょう。決して差別構造が残ったままの社会の中で、その社会が彼女ら彼らを「寛容に」受け入れてくれる道を探すことをハンセン病問題の取り組みとしてはならないのです。

国賠訴訟の原告勝訴の判決から間もない2003年11月に起こった、熊本の黒川温泉での宿泊拒否事件では、形だけの謝罪を拒否したハンセン病当事者への嫌がらせの手紙や葉書、さらにお説教するような「善意の差別」とでも名づけることのできる「忠告」の文書が届けられました※。それはかつての「無らい県運動」を推進していたキリスト教の団体MTL（Mission to Lepers）の理事がもっていた「救らい思想」と似ています。その特徴を示すなら「国家の保護を受け、社会の同情の許にわずかに生を保ちながら、人並みの言い分を主張するのは、身の程を知らぬ」と激怒する点です。

（塚田喜太郎「長島の患者諸君に告ぐ」『山桜』第18巻第10号、1936年）

※以下は菊池恵楓園に送られてきた手紙の一部（菊池恵楓園入所者自治会『栗川温泉ホテル宿泊拒否事件に関する差別文書綴り』より）

① もし私がホテルの支配人だったら、貴方達の申し出は断る。何故かと尋ねられますか。まず御自分の顔や身体を鏡で見て下さい。気持ち悪くないですか。私は十年前身体中に湿疹ができました。消毒薬に負けたのです。それ以来、公衆浴場には入っていません。他の人が入らない家族風呂に入っています。何故ならば、一緒に入った人に不快な思いをさせたくないという気配りです。貴方達ももう少し謙虚になりなさい…謝罪をされたホテルの人に対して声高らかに抗議している貴方達の見苦しさに我慢ができず便りしました。（熊本市60歳の女性）

② 世間の人達（公共機関の人達）がたてまえで口にしている言葉をうのみにして、本気になって思い込み、負

けん気で権利をふりまわして表面的な活動をすることは、我が身を知らない人間（身のほど知らず）だと思われるでしょう。（熊本市「本音をいう人」）

＜問われる救済観～救済の客体から解放の主体へ～＞

ハンセン病国賠訴訟の熊本裁判での弁護団の共同代表であった徳田靖之さんは次のように語っています。

「勝訴判決の確定の日、テレビカメラに向かって『これで人間になれる』と叫んだのは、すべての原告のほとばしり出るような思いそのものだったのです。／同時にこれらのことは、従来の私たちの訴訟観を打ち砕くものでもありました。判決という結果以上に裁判過程そのものが当事者の解放、人権回復として機能しうるということに気付かされたということです。私たちは、訴訟における被害原告は『救済』の客体ではなく『回復』『解放』の主体であるということを思い知らされたのです。／私は『被害者の救済』なる考え方の思い上がりを嫌という程思い知らされたのでした。」（徳田靖之「序『らい予防法違憲国賠訴訟』の歴史的意義と限界」『ハンセン病違憲国賠裁判全史』第一巻、2006年２頁）

星塚敬愛園の初代納骨堂

弁護団の訴訟観が打ち砕かれたようにカトリック教会の救済観も、ハンセン病問題に関する検証会議の『最終報告書』（2005年３月）で問われています。そこには「隔離の現実に覆いを被せる、そのことは、ある意味で究極の人権侵害」と記されているからです。良心的で善意の人たちは自分たちの無関心が「らい予防法」の廃止を遅らせ、現代まで続く差別や人権侵害を生み出してしまったと受け止めるのでしょうが、検証会議の最終報告書では別の主張をしています。そこでは決して無関心な態度が問われているのではありません。むしろ関心をもって支援したところに問題があったとの指摘です。

今も「愛の反対は憎しみではない。無関心である」とのマザーテレサのことばは有名で人口に膾炙して、カトリック信者にとっては慈善活動に勤しむ動機づけにもなっています。しかし、このマザーテレサのことばでは説明がつかないのがハンセン病問題です。なぜなら、世間の偏見や差別が激しいなかで療養所に足繁く訪問した宗教者の行為が「究極の人権侵害」と指摘されているからです。すなわち、訪問しながらも隔離政策を問うことなく療養所内での生活を前提に、場合によっては不平不満を戒め自己犠牲を勧めることで当事者が国策に抗うことを抑える役割を宗教者は果たしたのです。今でも宗教は社会のしくみとか構造的な悪については無自覚で個人の心のもち方や道徳の問題として捉える傾向にあります。その意味でハンセン病問題からは「救済とは何か」が問われています。

一方的に「教会の外には救いはない」と言って自らを「完全な社会」と規定し閉じられた世界を作っていた時代から、「開かれた教会」を目指すのは意義のあることです。

しかしそこでも自らを救済する側とし、何らかの問題を抱えつつ、それに向き合っている人たちを救済される側として固定化してきたことの権力性を自覚して見直すことが迫られているのです。自分を安全地帯に置いて、決して自らは変わることなく、変えられていく可能性も拒否した中で他者を「受容する」側に居続けるという意味での「開かれた教会」であるなら、未だに「教会の外には救いはない」との考えを維持したままということになります。そこでは教会を「開かれた」ものとする主体は誰なのかが問われます。

今の時代に「教会の外に救いはない」と思っている方は少ないでしょうが、「教会の中に救いがあるはずだ」との思いは多くの人の心のなかにあるようです。このような人々の「思い」とも「願い」とも言えるものは現実の世界を見る「枠組み」として機能します。その意味で、そのような思いや願いをも突き抜けて「救いがあるところ、そこが教会なのだ」という別の枠組みでこの世界で起こる出来事に向き合っていくことができればもっと違った生き方、信仰のあり方が現れてくると思います。そこに「開かれた教会」とのキャッチフレーズではなかなか見えてこなかった差別構造自体を問いそれをなんらかの形で解消していく場が開けてくるのではないでしょうか。ハンセン病問題からは教会のあり方や信仰のもち方が問われていることを再確認し、「慈善のわざ」について立ち止まって考える機会をもつことができたらと思います。

韓国ソロクト（小鹿島）のハンセン病療養所にあるモニュメント
ハンセン病は治る

ハンセン病市民学会 in 奄美・鹿屋

姫路教会　金原　薫

2016年5月、鹿児島に旅をしました。「らい予防法廃止20年・ハンセン病国倍訴訟勝訴15年を迎えて」を統一テーマに掲げた12回目の「ハンセン病市民学会総会・交流集会 in 奄美・鹿屋」です。個人的なメモや大会資料をもとに一参加者の思いをお伝えできれば幸いです。

5月12日、神戸空港からスカイマーク便で出発。現地奄美空港直行する方法もあったのですが、経営再建中の空港や航空会社を利用するのも一興、年金生活者にとっては何より料金に安さが魅力です。フライトは約1時間、鹿児島空港に到着。そこから空港バスで鹿児島中央駅（元の西鹿児島駅）へは1時間（！）、鹿児島新港からフェリーで11時間（！）の船旅です。個室やベッドの部屋もありますが諸般の事情で一番安

い「大部屋」を選択。

おかげでいろんな人と親しくなることが出来ました。勿論船内泊の「雑魚寝」。

13日早朝5時、名瀬港着岸。会場までのバスが希望者少ないので運行しないとのことに。さあどうしよう、タクシーを使うか、有料の仮眠室を利用するか迷っているところへ突然A神父が登場。彼は現在神奈川在住ですが奄美のご出身、ご母堂が健在で訪問を兼ねて早めにこられた由、しかも大型のワゴン車を駆って、港で立ち往生している参加者を迎えに来たといわれます。こんな幸運から奄美での旅が始まりました。会場の奄美和光園はすぐ近くだし、時間に余裕があるから名瀬の町を案内しようといわれて予定にないフィールドワークが実現しました。復帰運動の拠点になった「おがみ山」公園（ここでアカチョウビンの鳴き声を聞きました）、教会発祥の地の碑、名瀬聖心教会（フェリエ神父の胸像）などをめぐりました。

奄美にカトリックが伝えられたのは1892年、「この地に初めて西洋文化をもたらしたといえる。生活水準の低かった島の人々に文化を高め多くの恵みを与えた」。その結果「人口に対するカトリック信者率は長崎と並んで全国平均の6倍にもなるという。名瀬市には教会やその関連のものも多い」（教会パンフレット）。一般の観光案内も「貧しい暮らしに耐える島民の間で熱狂的に受け入れられた」と書き、120年の歴史を支える32の教会として教会めくりのページを設けています。昭和初期カトリック排斥の動きが強まりすべての司祭が引き揚げ、教徒への迫害も激化したことも述べられています。

奄美和光園は1943年に12番目の国立ハンセン病療養所として設立されます。当時は人里はなれた奥地で周囲を峻険な山に囲まれており、名瀬の市街地から海岸沿いに来るか、山越えをするかしか方法はありません。2005年近くを和光トンネルが開通し車で5分の近さになりました。当初定床100床でしたが、のちに入所者が300人を超えた時期もありありました。米軍政（1946～53）下の強制収用、他園からの引揚者等によります。その後減少し現在は34人が暮らされています。国立療養所13園のうち「一番小さな園」だそうです。

和光園の聖堂内

和光園で忘れられない人が三人います。一人目はパトリック神父、隣接地（他園のように敷地内ではなく）に教会があり、そこで司牧にあたりました。本土復帰の頃から園内出産を勧め、乳児院や児童擁護施設が作られて子供たちの成長を助けます。他園と同様園内に納骨堂もありますが、納骨されているのはごく少数です。家族・親族が引き取る例が多いからです。

二人目は小笠原登。絶対隔離に異を唱えた医師であり浄土真宗僧侶の彼は京大退官

後、豊橋病院を経て1957年和光園に医官として赴任します。ここで9年間治療と研究の日々を送ります。三人目は「日本のゴーギャン」と呼ばれた画家田中一村、1958年来島。小笠原と和光園官舎で共同生活を営みます。1977年に没するまで入所者・職員と交流し独特の画風で多くの作品を残しています。

手元に二冊の本があります。星塚敬愛園入園者自治会編『名もなき星たちよ―星塚敬愛園五十年史―』（初版1985　再版2004）、国立療養所星塚敬愛園『「名もなき星たちよ」抜粋版～敬愛園の歴史～』（2015）。書名から明らかなように後者は前者をダイジェストした小冊子です。前者の扉に2012.7.14と自治会会長の署名があります。実はこの日初めて湯人のＢさんを訪ね、自治会にご挨拶したとき頂戴したものです。それらをもとにこの療養所ことを記してみます。

敬愛園は1935年、病床300床でスタートします。園名は西郷隆盛の「敬天愛人」にちなむのだそうです。鹿児島県はかつてハンセン病患者が多く、地元出身の衆議院議員が中心となって誘致・設立されたものです。1936年には海軍航空隊が開隊、「ほこりの底で眠ったような大始良村の桑畑」のなかに、国立療養所が誕生します。しかしここでは、ワゼクトミー（断種手術）、懲戒検束・監禁室、園金など夥しい人権侵害が繰り返されました（これらについては最近完成した社会交流館の展示が物語っています）。

友人Ｂさんのことも記しておきます。彼は1929年徳之島に生まれ、5，6歳の頃発症。10歳で星塚敬愛園に入所されます。18歳のとき熊本の琵琶崎待労院（現在はハンセン病療養所は閉鎖）に一時転入、そこでカトリック信者になります（21歳）。28歳で星塚を「自主退所」大阪で暮らし始められます。お連れ合いを呼び寄せ結婚、一男二女に恵まれ他者会復帰を実現されますが、一時筆者の所属する教会に身を寄せておられたことがあり、それ以来のお付き合いです。

上野正子さんの踊り

12年お訪ねしたときははるばる志布志の港まで軽自動車でお迎えに来てくださり、お宅で歓待、園内を案内してくださいました。高齢になられてから自動車免許を取られ、ワープロを独習されて自分の半生を小さな冊子にされたり、大阪時代と同様活動的な日々を送ってこられました。あれから４年、どうされているかと案じながら窓口で入院中と教えられました。お許しを得てお見舞いにうかがうとベッドについておられ　耳も遠くなって折られましたが、補聴器を通してお話することが出来ました。やせ細った手で強く握手してくださいました。

2016年5月15日、聖霊降臨の主日のことでした。

津島久雄先生から学んだこと

バングラデシュのラルシュコミュニティ所属・
日本キリスト教海外医療協力会派遣看護師　岩本直美

津島先生と初めてお会いしたのは、私が看護学校２年生の頃だったと思います。当時私は大津で看護学校の寮に暮らしており、週末は京都の今出川付近にあった難民を支援する民間団体で、ボランティアとして古着の販売などを手伝っていました。ある日その団体の人から「今晩ピアノコンサートがあるから行ってみない？」と誘われ、気楽に一緒に出かけました。それは追悼コンサートで、筋ジストロフィー症で早世した青年のための追悼コンサートでした。そのピアノ演奏を行なったのは教会の牧師でしたが、彼のユニークな考え方のために属していた教派から破門された人でした。今ではその方のお名前も覚えていませんが、何かにとりつかれたように、肩までかかる髪を揺らしながら弾いておられたその姿は、今もよく覚えています。コンサートの後そのピアニストとどのような会話を交わしたのかは全く覚えていませんが、「あなたは長島にある邑久光明園にいかなければなりません。そして、そこにある家族教会の牧師津島久雄先生と会わないといけない。きっと、話が合うはずだから。」と言われたことは、よく覚えています。

ほとんど強引に感じられたその「破門牧師」の言葉でしたが、学生であった私は夏休みを利用して光明園を尋ねました。あの頃の私は、生きることの意味が見出せず悩んでいたことも確かでした。ドストエフスキーに魅せられまた様々な書物も読んでいましたが、真っ暗な果てることの無い長いトンネルを一人で歩いているような日々でした。瀬戸内の海の美しさに歓声を上げ、当時はまだ橋が掛けられていませんでしたから、小舟でゆらゆら揺られながら邑久光明園にたどり着いたとき、私はすっかりその島に魅せられていました。

それは８月のとても暑い日でした。赤い屋根の家族教会が見え開けっ放しの玄関先に近づくと、「いらっしゃい、いらっしゃい、直美さんじゃね、よーうきんさった！」と声が聞こえます。中をのぞくとシャツにステテコ姿の中年の分厚いメガネをかけたおじさんが、扇風機にあたりながら、且つうちわで顔を仰ぎながら、ニコニコと嬉しそうにこちらを見つめておられます。これが津島先生との最初の出会いであり、その後先生のご昇天まで長きに渡り頂いてきたご指導の始まりでした。

ハンセン病を病んでおられたために発汗の調節などが上手くいかず、先生は暑い夏が苦手でした。夕方涼んできた頃教会でお話をしながら、最初に教えてくださった賛美歌が、「いつくしみ深き、友なるイエスは」でした。眼の見えにくい先生の手をとり、昼間は教会のチラシなどを島のあちらこちらにある掲示板に貼り付ける手伝いなどをしていました。特別何か難しいことをおっしゃる訳ではなく、島の中をゆっくり歩きながら、この島に強制的に連れてこられた人たちのこと、そして先生の幼少の頃のこと、また牧師になられるまでの歩みなどについて聞かせてくださいました。今で

もよく覚えているのは、先生が突然失明されたときのことです。「窓際から電線に留まっている小さな雀の胸元の白い毛が、風をうけてふわっとふわっと揺れ動いていたのがはっきり見えていたんだよ。それが次の日の朝、眼が覚めても外は真っ暗で、あーまだ夜が明けてないんだと思ってそのまま布団の中にいたんだな。随分たって誰かが呼ぶ声が聞こえた、おーい、まだ寝取るんかって。その時に気がついた、あっ眼が見えない、全く見えないって。」

点字を読むためには指先を使いますが、ハンセン病のために指先の神経が侵されていましたから、津島先生は舌で点字の聖書を読み、牧師になるための勉強をなさいました。冬の寒い日、冷たい厚紙に出ている六つのぶちぶちを舌で読むのは大変でした。読めば読むほど冷たい紙のために舌が切れ、聖書が血で真っ赤になったとおっしゃっていました。「島の中の聖書学校に自転車で毎日通ったんだな。手術をして眼は少し見えるようになっていたんだけど、それでもあんまり見えてなくて、よくこけたもんだよ。あっちでぶつかり、こっちでぶつかり、、、」とカラカラと笑って、当時のことをよく話してくださいました。

津島先生の冗談も一級品でした。光明園を尋ねる度に、「よー直美さん、ようきんさった。ちょっとすまんけど、教会の前の庭をぐるりと一回りしてきてくれんかの。2～3回まわってきてくれてもいいよ。たのんますよ！」「えっ？先生、いいですけど、教会の庭に何かありますか？」と私がお聞きすると、「いや、庭の草が随分伸びたんでな、直美さんが来るのをまっとたとこじゃ。滋賀の人にあるいてもらわないけん。ほらゆうじゃろ？　近江商人の歩いたあとは草もはえんって！」そう言っては、またカラカラわらっておられました。私が滋賀の出身であるので、欲の深い近江商人は歩いた後に草も残さないという言い伝えを使って、そのような冗談をおっしゃったのです。先生とご飯を頂いている時でも、いわゆる駄洒落の連発のために、私も笑いが留まらずご飯が食べられなかったことがよくありました。

津島先生の口から、自分をこの島へ追いやった病気に対する恨みや、大きな過ちを犯した政府や行政に対する恨みや愚痴などは一言も聞いたことはありませんでした。いつも喜びと感謝のうちに生きられた方でした。先生はいつも仰っていました。「イエス様を賛美する生涯を与えられるのであれば、もし再びいのちを授かっても、僕はやっぱり再びらいを病む人生を選び取ると思うよ。」実に津島先生は、キリストの実存を私に初めて感じさせてくださった方でした。

光明園家族教会の讃美と私が出会うことが出来たことは、大きな恵みだったと思います。初めての礼拝で、津島先生と同様に島で生きる病友の皆さんの讃美に、深い感動と共に圧倒される思いに捕らわれたことをよく覚えています。はらわたから讃美するとは、どういうことかに触れることができたのだと思います。その後、私は津島先生に薦められるままに、当時寮生活をしていた大津にある日本キリスト教団の大津教会に通うようになり、そこで洗礼を授かりました。

当時多感な学生時代を過ごしていた私は、機会があれば津島先生をお尋ねし何でも

自由に分かち合い、聴いて頂いていました。「直美さん、義理を気にしちゃいかんよ。あなたの思うままに生きなさい。」といつも私を励まし、そして帰りがけにはいつもお小遣いをくださいました。「来る分のお金だけ持ってきなさい。帰りの分は僕が払ってあげるから。」それが、津島先生の口癖でした。

津島先生がご再婚なさった時、私はそのことをバングラデシュで伺いました。一瞬驚きましたが、すぐに「津島先生って、本当に人間くさい人間なんだ。だから大好きなんだな。」という思いが沸きました。本当に肉の心のある温かい方です。

バングラデシュでの暮らしが長くなり、その後頻繁にお会いすることは出来なくなりましたが、一時帰国の折に機会があれば先生をお尋ねしていました。あちらの暮らしについて仕事はどんな風かとお尋ねになるのではなく、私が訪ねていったことが兎に角嬉しいといった風でした。いつも祈ってるからねと、タクシーが遠くになるまでいつまでも見送って下さり、それはまるであの「放蕩息子の父親」を思わせました。

最後にお尋ねした時、私は邑久に向かう旅の途中で列車の席で揺られていました。あまりお具合が良くないので、もしかするとこれが先生とお会い出来る最後の旅になるかもしれないと思っていました。何となく落ち着かず、日頃よりお世話になっている当時の光明園の園長でおられた畑野先生にお電話をすると、「残念だけど、たった今、逝かれたよ。」とやさしい声のお返事がありました。翌日のご葬儀に、私一人ジーンズとジャケット姿で参列しました。周りの方々には非常識と映ったことと思いますが、「そんなこと、気にせんでよいよい。」という津島先生の言葉が聞こえてくるようでした。数年振りにお会いした津島先生との再会に涙が止まりませんでしたが、先生の温かな表情はあの当時と少しも変わりありませんでした。

津島先生から頂いたもの、それは喜ぶこころ、感謝するこころ、そして許すこころです。

先生はそれを先生ご自身の歩みと生き方を通して、私に教えて下さいました。キリストを生きられた方のご生涯の一端に触れることが出来たことの恵みを、神様に心から感謝しています。

主の平和

シリーズ：聖書（いのちのことば）を生きる⑩

「見失った一匹を見つけ出すまで」

【ルカによる福音書15章1～7節】

大阪教区司祭　吉岡　秀紀

今回はほとんどあるマンガの話です。

『ちーちゃんはちょっと足りない』。タイトルにいささかギョッとしました。コミック（マンガ）本で、作者は阿部共実（あべともみ）さん。それまで存じ上げなかった漫画家さんです。気になり、ちょっと調べてみますと、この作品は第18回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞などいくつかの賞をとっているようです。評価を参考にしてマンガを読むことはないのですが、タイトルが気になって買ってしまいました。

ちーちゃんこと南山千恵は中学2年生。身体は小さく、行動も幼い。九九もできなかったりします。作中に明示されていませんがおそらく知的障がいをもっているのだと思われます。

わたしは当初、友人たちが、ちーちゃんをありのままに受け入れて互いに成長していく、みたいな物語かなと思っていました。ただそれだとちょっとありがちな展開なので、あまり期待はしていませんでした。

ところが、読み進めていくうちに、この作品のキーワードであろう「足りない」の意味が少しずつ見えてきて、慄然とさせられました。

ちーちゃんの友だちは、同じ団地に住むナツ、一戸建てに住む比較的裕福な家庭の旭（あさひ）。クラスメイトでもあるこの3人の日常風景が基本的には描かれています。ちーちゃんはクラスでいじめられることもなく、「しょうがないなぁ。でもそれがちーちゃん（南山さん）」という感じで受け入れられ、日々を過ごしていきます。

そんな中、ちーちゃんとナツは、周囲にくらべて自分たちはいつも「足りない」という思いを募らせていきます。お小遣いだったり、成績だったり、「彼氏」だったり（旭が女子の憧れの的である先輩とつきあっていることも知ってしまいました）……。

思いがけない事件が起こります。女子バスケ部が顧問に誕生日のプレゼントをするために部員から集めていたお金が教室で紛失。部員たちは「悪びれもなくそういうことしそう」とちーちゃんによる窃盗を疑います。正義感の強い旭は憤り「あいつはバカだけど絶対そんなことしねえよ」と激しく反論。

ナツは、ちーちゃんから「もらった」お金の出所を不審に思いながらもほしかったブランド物のリボンを買ってしまいます。リボンが「華やかな中学生生活の第一歩」になることを期待して登校するナツ。ですが、髪を飾って教室に入っても反応はない。昼食時、ちーちゃんにお箸の持ち方の間違いを注意したナツは、旭から自分の箸の扱

いの誤りもさらっと指摘されてしまいます。口々に箸の持ち方を親から教え込まれた体験を話し出す友人たちを前に、ナツはリボンをほめてもらうどころか「底辺だ バカで貧乏な私は品性まで欠けてて 親の差まである どうしようもないな」と孤立を強く感じさせられます。

さて、女子バスケ部の消えたお金……「犯人」はちーちゃんでした。自分とナツはいつも「足りない」、だからやさしくしてくれる「いいやつ」のナツを喜ばせたい、自分たちはいつも足りないんだから、お金があるところからとったっていいじゃないか。それがちーちゃんの思いでした。ちーちゃんを信じていた旭は愕然としながらも、いやがるちーちゃんの手を引き、女子バスケ部員に謝罪します。

クラスで不良と見なされ、ナツやちーちゃんに怖がられていた藤岡。彼女は女子バスケ部員でありながら、両親が家業で忙しく妹たちの親代わりをしているため、ほとんど部活に参加できずに迷惑をかけていると、お金を出せなかった部員の分まで出していました。ちーちゃんに理屈で罪をわからせようとする旭たちに対して、藤岡はちーちゃんに、仲間思いのいい話だ、とあえてその行いを受けとめ、その代わり、ちーちゃんが大事にしているヘアゴムを、妹が喜ぶから、と奪おうとします。ちーちゃんは自分がしてしまったのと同じ行為をされることで、奪われた人が傷つくことに気づかされます。それがきっかけとなって、ちーちゃんと藤岡は仲よくなり、旭と女子バスケ部員たちもわだかまりが解け、つながりも広がっていきます。

いっぽう、その場にいなかったナツは、ちーちゃんや旭が藤岡たちと仲よくなったことも知らず「共通の話題」のつもりで、藤岡を「不良」と決めつけて悪しざまに言い、また藤岡たちと遊ぶ旭の姿を街で見かけて衝撃を受け、ちーちゃんに「(お金を)返さなくてもいいよ、藤岡さんになんて」「あと、もう旭ちゃんとも遊べないから」と言ってしまいます。

ナツはちーちゃんを、自分より「ちょっと足りない」、自分がいてあげなきゃだめだと捉えていたのかも知れません。でも、変わろうとしているちーちゃんを前に思わず「私たち、ずっと友達だよね？」と言うのです。自分の「足りない」ことを突きつけられてしまったナツに、自分だけがとりのこされていく不安が広がっていきます。でもそれは、旭も藤岡も、そしてちーちゃんも感じたこと、あるいはこれから直面することかも知れません。

長くなってしまいましたが、この作品を読み終えて、また何度も読み返して、思い起こしたのがルカによる福音書15章１～７節の「『見失った羊』のたとえ」です。自分たちは神に忠実に生きているとする指導者たちに、イエスはこのたとえを話されました。

わたしは、初めてこの箇所を読んだ時から、羊飼いに黙ってついていった99匹＝「悔い改める必要のない九十九人」(15.7)に違和感を覚えました。おそらくイエスは、指導者を前に「あなたたちは、自分たちこそ落ち度のない信仰者だと思い上がり、人を裁いているのではないか。むしろ、誰もが（あなたがたも！）迷い出た、弱い一匹の羊なのだ」とおっしゃっているように思えるのです。

ちーちゃんも、ナツも、旭も、わたしも、あなたも「ちょっと足りない」。「私は 変化すること……衝突すること……が怖くて……何もしない ただの静かなクズだ」というナツの心の声に、わたしは自分との境界を見いだせないのです。

第８回対話集会
「出・会・い・を・つ・な・げ・て」

日　時　2015年　11月2日～３日
場　所　河原町教会・カトリック会館６F
発題者　山本　栄子さん
コーディネーター　山村　暁子さん

山村さん■山本さんはあまり深刻にならないように明るくお話をしてくださったのですけれど、深刻な話を深刻に話されたら「どーん」となるのですが、明るく話していただいて、「天皇制」もそうですし「先生の対応」にしても、戦前の差別に対して、それを止める法律が無かったため、差別に加担するというのがあり、多数の国民のためには少数のマイノリティーは何もなされてこなかった、多数の為に少数派は犠牲になってもしょうがない、というようなものが性格としてあったというのがありますね。それって、今の世の中にもつながって来るんじゃないかなあと、そういうことを思いながら聞いておりました。出てきた質問の中で子ども同士がどうやって、地区の偏見を被差別部落に持つようになっていったのか。山本さんの考える当時の状況の中で、思っておられることで結構です。

山本さん■子どもって、最初はだれも知りませんよ、知らないけれど、結局親の話を聞いたり、大人の話を聞いたり、そういう中から、「あそこは」という思い方をするのかなと、今は街作りが盛んになって、住宅も建て替えられて、「あそこが部落やったのか」と思うところもありますが、けれども、先ほど見てもらったように、見ただけでも「ここはなに」というような場所でしたし、やはり親が教えます。「あそこの子どもと遊んだらあかんで」とか「あそこへ行ったらあかんで」とか、子どもにしてみたら、「何で、何で」ということになりますし、そういう中で親が教えていく、学校へ行けば先生が差別する…だから子どもは覚えていく、そういうことです。

山村さん■お話しいただいたのは、山本さんが朝田善之助さんに会う前のことなんですけれど、その当時幼いながら、一本筋が通った生き方をなさっているというのは何かなあと、その辺をお答えいただくのは難しいかもしれませんけれど、山本さんなりの、「こうかなあ」と思っておられるのがあればお聞かせください。善之助さんと出会う前なのに、先生からの差別や、これは何なんかなと、それらを子どもなりに思っておられたのは、それって何ですか。

山本さん■それはうちの部落は貧乏です。それで誰も学校へ行っている人はありません。さっきも言ったように、働きたい気持ちはあっても学歴がない、家の近くに「島津製作所」がありました。そこには朝には他所からどんどん出勤されるけれど、うちの町内からは、いまだにですよ、私が知っている範囲では、島津製作所へは誰も就職していません。行けない理由というのは勿論学校へも行っていない、履歴書も書くことができない、そんな事で会社勤めができない。私が子ども心に思ったのは、「貧乏やのに何でお兄ちゃんや、お姉ちゃんは働かへんの」と、それが、すごく小さい時から疑問でした。何で働かへんの、働かへんから貧乏やんか、とそういう疑問を私は常に持っていましたよ、そういうことです。

山村さん■誰かの入れ知恵があったわけじゃなく、山本さんが学校の先生に「何で自分たちばっかり」という思いから、自然と持つようになったということですね。山本さんの身内の方に、部落出身だと伝えることをどう思われていたのか、その辺の事を、葛藤とか、悩みとかその辺をお聞き出来たら、どういう状況で話されたのかとか、自分の歴史とかを子どもたちに
伝えておきたいとか、最後のまとめにもう少し聞きたいと思うのです
けれど簡単に教えていただきたいのですけれどお願いします。

山本さん■自分の子どもにどう教えて行くのか、という話ですが「子どもに教えるって難しいです」と、私集会に行くたびに聞くのですね。私は、なんでそんなに難しく思うのと、あんた今、ここへ、何しに来てんのと集会で言うんですね。あんたここへ来ているじゃないのと、私は子どもには解っていなくても、自分が集会に行ってきて、こういう話を聞いてきたよと、常に家の中で息子一人しかいないのですけれども、常にその話をしていました。集会に行った時の話をね。まだ小学校ですが、どこまで聞いてくれているかは分かりませんでした。私は集会へ行って来たら必ず家の中で「こんな話があったで」とか、「こんなこと言ってはった人があったよ」とか言っていました。そしたらある日、担任の先生が家庭訪問をしてくださったその時に、「山本さん今日ね、『先生ぼくは部落の子やで』と言うてね」と言われたんです。先生は勿論地域担当をしておられるので、どういう所に住んで、どういう生活をしているかを知っておられるんですが、ところが本人が「先生、ぼくな部落の子やで」と平気な顔をして言ったよと先生が言ってくださったんです。そうですか、言いましたかと。私は「あんたは部落の子やで」と子どもに一回も言ったことがないと、けれども私は常に話はしています。自分が集会へ行った場所、家を空けるので遊びに行っているんじゃないことを知らせるためにも、聞いてきた話を話す、それを言ってくれたんかなと思ったんです。だから自分は、どこで、誰に、教えてもらったのか振り返ってください。
近所のお姉ちゃんに町工場へ連れて行ってもらったのが始まりなんです。12歳ですね。6年で卒業して、私は街工場へ働きに行ったんですけれど、何と社会の厳しい差別。学校の先生に「えたや、部落や」と言われたけれど、それ以上の差別があったと

いうことですね。社会って「わあ、怖い所やな」と、先ずそう思いましたね。やはり、文字を持たない人間の悲しさ。勤めに行った時に事務所の人が「ここへ名前書いてハンコ押して」と持ってこられた書類が私には何だか分らない、読めない。「ハンコを押してな」と言われて、ハンコは一番大事な物だということだけは教えてもらっていたので、何だろう分からんところへ押したらあかんなあと思いながら、私はやはり文字の知らない悲しさを突きつけけられたという気がして「文字は取り戻さないと」と思って「なんぼ先生に怒られても、もっと勉強しておいたらよかった」と思ったのです。でもその時は、それどころじゃなかったしね。働きに行くことがすごく嬉しかったけれども、社会の中の差別というのは、これは何というか「世間って、こんなんか」と思って、それで文字は取り戻さないとあかんなと、そこで分かりました。

気はついたけれど、誰に教えてもらったらいいのかな、そんなのは誰もおりません。みんな学校も行っていませんし、近所のお兄ちゃんお姉ちゃんに言っても、文字は教えてもらえない。がむしゃらに、私は広告を見たり、その広告の裏に文字を書いたり、さんざんそれをして来ました。そんなことだけではとても文字を覚えることはできませんし、どうしたらいいのかと、自分で考えてもどうしようもなくもがいていました。苦しい生活をしていました。

山村さん■それが識字への活動につながって行くのですね。識字教育を地域の中で始められるようになられるんですけれど、そんな中で解放運動をされますが、その方が先ですね、朝田善之助さんと解放運動との出会いを、戦後にされるんですけれど、それを話していただきたいと思っていまして、「解放同盟」という存在をいつ知ることになりましたか。というところに入りたいのですが。

山本さん■解放同盟は私の地域で京都市内の各行政区に部落があります。京都は11区ですね、そこに各部落があります。その中で、私の地域は京都市の中では一番小さい部落です。西三条といって嵐電の三条口、西大路三条で小さい部落で、他の部落に比べたら封建的でした。だから解放運動も遅れました。他所の地域では解放同盟の支部を作りどんどん運動をしておられる中で、うちの地域だけはオルグも遅れましたし、そんな中で運動が進んで行かなかったのは、封建的で水平社運動がオルグに入った時点で、何だか私の地域は水平社ともめたらしいです。私が聞いている話では、水平社を立ち上げてそれぞれの地域で立ち上がったにもかかわらず、私の地域は「そういう革新的なものはいらないと、水平社のオルグに来られた方と青年団がもめたんよ」ということを聞きました。

そういうことが引きずられてきたのかなと、私の地域の人たちは「自分たちの生活を立ち上げないとアカンという解放運動をしている人で、何か怖い人らしいで」と聞いたのです。自分が今までの生活で、何も分からないので、どこを見てもうちの地域は貧乏な人がいっぱいおられるし、私はこの「部落」というものに、いつも疑問を持っていたので隣保館へおそるおそる聞きに行ったのですよ。隣保館へ聞きに行ったら、

やはり私がずっと疑問に思っていたことを一つ一つお話しておられるので、「ああ、これか」と、その時初めて私は解放運動と出会ったんです。私が疑問に思っていたことを解いてくれているし、もう少し聞きたいなあと思ったのが運動の始まりです。

山村さん■お家の方はどんな感じでしたか。

山本さん■わたしは聞きに行かないと分からないしと言いながら、家の中でそういう話をしていました。分らないことを教えてくれる組織だと、足を引っ張るということはなかったですね。私は聞いて来たことを常に話しました。私らがオルグの中で聞くことで、「就職の機会均等」、私らが安定した仕事につけないのは、やはり、こういう原因があるのだと。先ず「文字が持てない、学校へ行けていない」からよい所へは就職出来ない。就職ができないということはお金が儲けられない。お金がないということは、子どもに学校へ行かせられない、そういう悪循環ですね。それらはどこかで誰かが断ち切らなかったらいつまでも悪循環ですね。それを中途半端であっても、聞いて来た話を家の中で言っていたんです。だから、行くなということは言わなかったけれど、あんまり続くと「また行くんか」という事はありました。「聞かなかったら、分からないしね」と言いながら「ちょっと行って来ます」と言って私は行っていました。今思ったら、私は有難かったですね。「行くな」と家族に言われたら、私は行けなかったと思います。

山村さん■その解放同盟は「また行くのか」と言われるほど何回も話に来ておられたんですか。

山本さん■路地集会というのがありました。大きなオルグは隣保館でされるのですけれど、路地集会は、どこかの誰かさんの家で「今日、誰かさんの話があるし聞きに来ないか」ということが常にありました。それはよそへ行かずに町内の中に来られるので話を聞きに行って来ますということで出かけました。

　朝田善之助さんはすごく偉い方で、全国の委員長でしょう。私も、朝田善之助さんの名前が出たので言いますけれども、「朝田善之助さんて何者や」と、思われると思いますけれども、私にしてみたら育ての親なんです。親も教えてくれなかった、先生も教えてくれなかったことを、朝田善之助が教えてくれたということですね。朝田善之助も人間ですよ、それぞれの見方もありますし、「朝善さんに教えてもらったん」とよく言われるんです。朝田善之助のやっていることで、私は悪いところを見なくていいやんかと、善之助さんの良いところを取ったらいいのと違うかと、私はよく言いました。確かに反対する人もあります。批判する人があります。でも私は今皆さんとこうしてお話が出来るのも彼の教えが根底にあります。それを常にもって、皆さんと接触して行き、皆さんと一緒に考えて行けたらありがたいなと思っています。その意味で朝善さんは、私の育ての親だと思っています。確かに批判している人もあります。私

はあって当たり前だと思っています。それぞれ環境も違いますし、生活も違います。物の見方も違います。それぞれ置かれている立場でその人を見ますのでね。

山村さん■私にとったら善之助さんは教科書みたいな遠い存在なのですけれど、今、やはり、山本さんのお話を伺うと、今話を聞いて実感を持ってありがたいなと思いながら、本当に私にとったら白黒の写真の人なのですね、善之助さんって。失礼な言い方と思いながら、お話を伺っていて、やはり一人の人間であって、部落解放をすごく考えて尽力されたことがよく分かると思いながら話を聞かせていただきました。少し、また支部での解放運動の話に戻したいなと思うのですけれども、支部で、すぐに結束とならなくて、DVDにあったように、とりあえず朝田善之助さんの女性部に行くことになったということですね、そのあたりの時代の話をお聞きしたいなと思います。

山本さん■朝田善之助さんのおかげで、まだ支部がなかったんですが、「うちへ来て勉強しいな」と言ってくださったので、朝田善之助さんを私たちは常に「おっちゃん、おっちゃん」と言っていたのです。「とにかくおいで」ということで、私は出入をさせてもらっていたのです。そうしたらすごい人が出入をしておられるのですよ、歴史学者の奈良本先生、京大の上田正昭さん。写真を見て分かると思いますけれど、常に炬燵を置いて本箱を背にして、皆さんがそこへ行かれるのですね。「水平社」を立ち上げられた米田富さんもよく来ておられました。創立者ですよ、直接聞かなくても、おっちゃんと話しておられるのを見聞きしていると、少しは自分の中に残って行くのですね。そんなことで、いろんな人と知り合いになり、いろんな所で教えていただきました。米田富さんはすごく朝田善之助さんを崇拝しておられました。

山村さん■完全に日本史の世界ですね。多分皆さんの方が私より共有する世界ではないかなと思いながら、私にとって、米田富さんは日本史の世界です。水平社自体は、やはりその宣言がむしろ今やから輝くものがあるのかもと、個人的に思っているとしか言えないですが。朝田善之助さんが「答申」を出させるために運動をすることで、この後いろんな批判があるというのがチラッと話が出て来ましたが、当然全員「この人がいい」という状況って何かしら不自然な力が働いているとしか思えないような中で、やはり批判する人もあり「朝田さんはそんな人じゃないすごく尽力してくれた」という人もいるし、そうでないことも当たり前であると、お話を伺っていて思ったのですけれども、今まで同和問題を解決するのに解放同盟が一団となって65年まではやってきて、69年に朝田さんが批判されたりとか、ややこしいことがあるような流れになるのが、69年の「同和対策特別措置法」ができてからと思うのですけれど、そこで、「同盟」と「全解連」とに分かれる一つの大きなことになって、その時に山本さんは、そこに立ち会っていると思うのですけれど、当時山本さんが運動していて思われた厳しい状況について、どうだったかを山本さんの立場でお話いただきたいと思って、この重たい今日の話の最後にして一旦締めくくるという事でお願いします。

「確かに同対審答申というのは毒饅頭だ」と、解らずに食べたら大変だけれども、これが毒饅頭だと分かれば毒を避けよと言われたんです。それを今受けなかったら、政府を動かす同和対策事業を実現させて行かれないと朝善さんは言われたのです。それを受けて運動をして行こうと言われたんです。なかなか100％あれがいい、とそう簡単には行かない、欠陥はあるだろうということで、私は、それは毒饅頭だということを教えていただきました。毒が入っているということを自覚しながら使っていけばよいと、だけどそれは反対という方もありましたし、それで朝善さんとは一緒に運動はできないということで分かれたようです。

山村さん■答申自体が、理念だけじゃなく事業も入っているということがあったんですね。「同和対策事業」私の解釈では事業が入っていて、理念だけなら分かれずに進んでいたと思うのです。その中に劣悪な生活環境や、子どもたちの教育状況をどうにかしなければならないと、助成金が入って来る。助成金を受けることは絶対良くないという人があり、
「いや分かっているけれど、受けてこの状況をどうにかしなければならない」という人と、分かれて行くということがありまして、その真只中におられたのが山本さんで、私なんかは後から聞く話で分らないのです。その時代の経験をされているということで是非ともこの話をして欲しいということで、頼んでしていただいたのです。「毒饅頭」だと朝田さんが言っておられたということは…

山本さん■それは百点満点という答申じゃないということは分かっているということです。

山村さん■そういうことは先のことを見通して、それが分かった上で、当時厳しい差別状況があったということだったと私は思っているのですけれど、どうですか。

山本さん■そうです。どうにかしないと、どこかで立て直して行かないと言うことでやはり毒饅頭だったとしても、それを受けて行こうと、そして街づくりをして行かないと子どもに教育をつけないと、若者の就職についても考えて行かないとと。

山村さん■ドカンと落ちるような話をして、私は実際答申を受けて育って来た世代ですし、山本さんたちが一生懸命で取って来てくれた、そのおかげで自分の立場とかをハッキリと持っているし、私の親とかも奨学金を受けて教師になれたという、実際にそれで助けられたということで、私は個人的には答申のおかげだと思うのですけれども、いろいろ意見は分かれるけれども、一定の成果というのは出して来ているんではないかなと、受けた者としては思っていますとつけ加えたいと思います。

山本さん■それは確かに出たときは良かったんです。必要だったのです。何年か続く中

で残念な話もいっぱい出てきています。それを利用する人が出てきました。せっかくの同和対策事業でありながら、それを悪用する人、利用する人が出てきたことに「やはり解放同盟って行政依存やないか」「物取りじゃないか」という批判される状態が生まれてきました。私は残念やと思っています。自分たちの仲間がそういうことをしてきた、「なんで」ということはこれからの課題じゃないかと思うのです。最初は本当に必要でした。それができたことによって 奨学金も出てきましたし、学校へ行く子どもが出てきました。学校へ行けばちゃんとした就職ができるようになりました。そういうことにも関わらず利用する人が出て「物取り主義や、解放同盟はけしからん」と言われて、末端で運動している人はすごく残念がっています。

山村さん■マスコミも事件ばかり言う割に地道にどうにかしようと思って仕事を返上してまで運動してきた人にまで、あまり運動はできてないなという、その辺の不公平さがあるのではないかと思います。でも実際事件は起こっているので、解放同盟もその辺は反省をすると言っていますよね。その辺の総括というのは反省として出しているんじゃないかなと。運動して来た人は、解放同盟としては分らないですけれど、その辺の反省は出していると思います。そういう事業を見るという部分がありながら、やはり、明日から話していただく「識字教育」という教育の光の部分を忘れてはならないことだと思っています。

山本さん■私ね、運動批判が悔しいのです。やった人を批判して欲しいのです。運動がしたんじゃないのです。やった人は反省して欲しいと思います。やはり、「解放同盟」という一言で言われると、私も解放同盟員ですけれど、運動は批判されたくない、批判するならやった人を批判して欲しいです。そういう思いがあります。

＊運動を批判されるのは悔しいと、本当にそうだと思います。人間ってそういう仕組みの中でしか動かれないのかと、そんなことは決してないと思います。何かいいこと、「毒饅頭」の事をおっしゃいましたけれど、良い制度や良い仕組みがあっても、それを悪く使おうと思えば何でも使えると思うのですね。やはり自分の中で何を求めてそういうものを勝ち取って来たか、そういうことを思うと悪く使う、利用するという事はないと思いますが、人間の弱さというのか私たち自身も仕組みというもの、人を生かすためにより良くするためにそういったはずの仕組みを否定すれば、それじゃあ私らは何の為に何を求めて来たのかという事になるでしょうし、その中で仕組みを活かして行くと私たち自身が問われているんだという事を感じますね。最近よく聞くのは今こういう状況になって、人って何でしょうね、平和のことにしても社会の問題にしても政治とか、大きな力が解決するとは思ってないんですね。それ等をうまく使って行かないといけないというのがあるんですけれど、結局私たち自身が、自分自身がそれとどのように向き合うのか、関わるのか、大きな問題の中でも私はそう思っているのです。この間あるカトリックの司教の話の中で、本当に難しいことがいっぱいあるけれど、事、教会の中でもよく話し合って分かち

合って欲しいと、そこで自分自身で選択して欲しい、考えて決めて欲しいとおっしゃっていました。印象に残っているのです。自分の体験の中で示してくださったかなと思いました。ありがとうございました。

＊私の今日のお話の中で、今こういう憲法の問題であるとか、組織の問題であったり、そういう事への疑問であったり怒りであったり、基本であったり、そういう時に山本さんが応えた自分で取り戻さないとあかんのやとか、そういう自分の自発的な思いの中から、勉強して行って、そういう事が非常に大事だなと、私たちもそういう社会の中で闘って行かないといけないなと感じました。ありがとうございました。

＊私も山村さんと同世代なので、今でも周囲と話をしたりするときに、受けるか受けないかの影響があるのかなと感じる時があって、そういう方にはそれ以上対話を続けにくくなって、詳しくは今まで話していなかったけれど、今日お話を伺って、そういう事情があったんかと思いました。運動を批判されるのは嫌で、それらを利用した個人を批判して欲しいと、全くそのとおりだと思いました。何かグループで批判されるってすごく嫌ですし、他の問題でも同じ学校の他の人がやったからってグループで批判されるのは嫌ですね。そういうのはすごくありがちですね、共感いたしました。ありがとうございます。

＊毒饅頭というのは、饅頭はいいけれども、毒が入っていれば気をつけなさいと。結局行政側からの支援というものに迷ってしまって自分たちの運動が、力が無くなってしまうようになるのが、饅頭の中の毒の効果だと思うのですね。お話を聞いてぼくが思ったのは、他の支援をしているのですけれど、耳が聞こえなくなって困っている人がいて、その人を助けるという時に、これはちゃんと行政に言って健康保険も無いそういう状態の中で、人間の権利として、治療を受けさせるという事を大事にしようと、ずっと行政に働きかけたという事があったのですね。でもなかなか埒があかないので、本人がすごく耳が痛がったりして、教会にお医者さんがいたものですから治してもらったんですね。そしたら、結局治してもらったことに関しては、それはよい事なんですけれど、本人は自分の権利として闘ったのじゃなくて、行政局の方にありがとうという立場になってしまったんですね。とても難しいと思うのですね、事業を受けることをやり通してくれと言わなくちゃいけないのかね。それとも行政にお金が要ることをどうしたらいいのか言うべきだったか、そういう例がありましたが、やはり貧困の鎖を断ち切っていく支援というのはどうしても必要ですし、そういう時に人間としての誇りとか、運動の主体性とかを無くさないでそれをちゃんと生き抜いていくというのが難しかったんだなと思いました。

山村さん■質問が出ていたのですけれど、毒饅頭とは何か、と、山本さんが伝えようとしていた朝田さんの毒饅頭とは一体何かと。

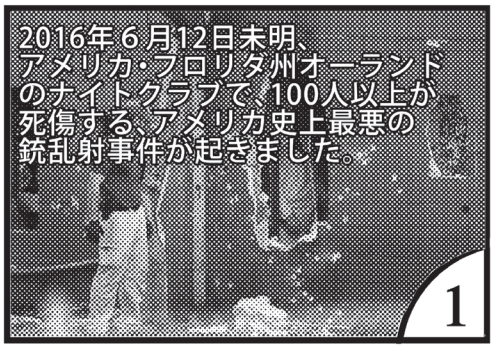
山本さん■毒饅頭とは、私は行政というのはね、いつもアメとムチなんですよ。だか

ら、その辺のことを言っていたんじゃないかと思います。今沖縄のことを考えてください。沖縄に対して何て無礼な、と腹が立ちました。賛成するところには助成金を出し反対するところには何もしない。私、誰のお金を使うのかと、腹立ちましたよ。私らも曲がりなりにも税金も収めていますよ、そのお金を自分たちの都合でそこへは渡す、ここへは渡さないって私はけしからん話だと思いましたからこの毒饅頭というのは確かに行政のやり方です。アメとムチという、その辺を朝善さんが教えてくれたんです。気をつけなさいよと、見ていないといけないよと、私は教えてくれたと思うのです。

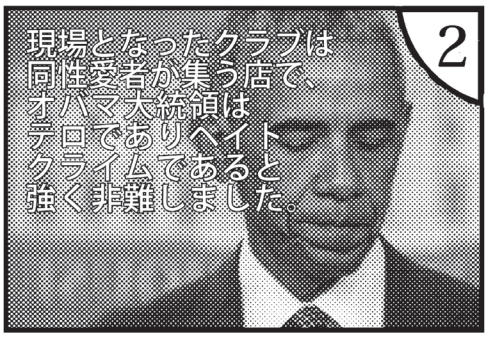
山村さん■個人的に今の答えはよく分かる気がするんですが、皆さんこの際に聞いてください。全解連と解放同盟が別れたということですが、政党系で言えば共産党とそうでない方が分かれた、同盟の方が非共産党で、全解連が共産党でということを、私は後から聞いたのですが、それでいいんですかね。それも山本さんの個人的な意見ですけれど、組織関係なしで個人的な意見で結構ですが、私は共産党系とそうでない系と思っているんですけれど、太田神父さんよろしくお願いします。

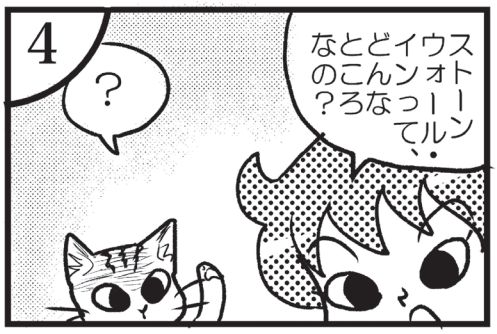
太田神父さん■ぼくの理解では、共産党の人たちは、解放同盟の運動に対して次のように考えていたと思います。つまり、解放同盟の本当の解放は労働者階級として、共産党の運動に参加することで実現される。党の運動を助けるべきであって、党が解放同盟の運動に参加するのではない。解放同盟が持っている、差別を受けたという傷は、個人レベルで解決してくれと。運動においては、自分たちが傷を負ってきたということは無しにしてほしい。これに対して、朝田さんたちは現実に傷を受けてきた人達がいるのに、その傷を運動のエネルギーにしないのはおかしい、被差別体験を運動から外すわけには行かないという事です。だから、共産党とは一線を画して独自の運動を組織するしかない。こういわれると共産党の人たちは部落の人が差別を受けてきた苦しみは分かるけれど、それは過去のことであって、現在では部落差別は解消過程にあると言っています。だから部落差別については女性差別や障がい者差別などの一般人権問題として対処していこうと答えると思います。

Somewhere over the rainbow !
のたちゃんの
Cacca
Human Rights
by・タナカ・ユーマ
#39 2016年6月12日 未明


2016年6月12日未明、
アメリカ・フロリダ州オーランド
のナイトクラブで、100人以上が
死傷する、アメリカ史上最悪の
銃乱射事件が起きました。
1

マンハッタンにあるLGBT運動の
象徴である、ストーンウォール・
インの前にも犠牲者の追悼の為に
たくさんの人が集まりました。
3


2
現場となったクラブは
同性愛者が集う店で、
オバマ大統領は
テロであり、ヘイト
クライムであると
強く非難しました。


4
？
なとどイウス
のこんンォト
？ろなっーー
てルン、

#40 1969年6月28日

翌日には店の前に2000人ものデモが集まり、各地でLBGTの権利獲得のための運動が広がっていったの。

その翌年6月に、暴動を記念して行われるようになったのが、プライド・パレードなんだ。

ストーンウォール・インと言うのは、1969年にアメリカで起きた、性的マイノリティの権利獲得運動の舞台になった場所なの。

ちなみに、LBGTの運動を象徴するレインボーフラッグは、ジュディ・ガーランドが歌った『虹の彼方に』に着想を得てると言われているよ。

レインボーフラッグ

一般的には赤・橙・黄・緑・青・紫の6色が多いですが、バリエーションは様々にあります。

【ソドミー法】
特定の性行為を性犯罪とする法律のこと。
まだまだ世界中に存在する。

まったく、ひどい法律だよ!

当時のアメリカでは同性愛者を処罰するソドミー法があって、同性愛者はそれに隠れながら生活していたんだ。

snpy.tv/28Q6lXd

にて、
ホワイトハウス制作・オバマ大統領がナレーションの動画が観られます。

そして、ストーンウォール・インは、今年6月にアメリカの国定史跡に指定されたんだ。

そして、警察の点数稼ぎの為に、ニューヨークのゲイバーは度重なる摘発を受けていたんだ。

Judy Garland (1922~1969)
代表作「オズの魔法使い」「スター誕生」

そんなある日、同性愛者に大人気だった女優のジュディ・ガーランドが急死し、ストーンウォールインの近くで葬儀が行われた。

彼女の死をともに悼み、話をしようと店に沢山の人が集まったところに警察が踏み込んできたんだ。

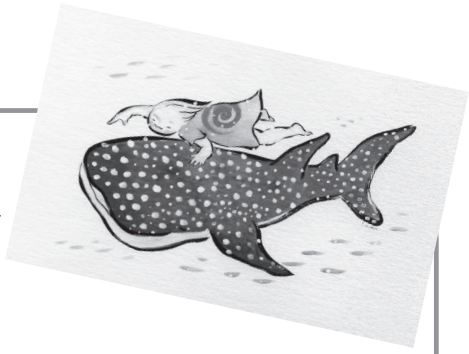
いつもならすんなり取り調べに応じる彼・彼女らは、"この日だけは!"と、警察に対して暴動を起こした。

同じ6月には、教皇フランシスコの同性愛者への謝罪コメントもあったし、もっと、色んな人が住みやすい世界になっていくといいね。

だといいなぁ…

2016. 7. Yu

第９回対話集会



日　時：2016年9月18日（日）13時～19日（祭）12時30分

場　所：枚方市禁野本町にあるクラレチアン宣教会の

部屋を使わせてくださいます。

（改築され、新しい畳の匂いのする和室で雑魚寝ですが広さはあります）
移動の必要がありません。

講　師：山本純子さん

プロフィール

初めての勤めた同和保育所で、地域の母親から「先生部落差別の事わかってんの !!」とつきつけられた。……「昔のこと、ずっと遠くの事」と思っていた部落差別が、「今!!ここにあるんだ!!」と感じた。学習会での同対審の勉強や啓発ビデオよりも、地域の母親との出会いのインパクトが強烈だった。それから結婚。自分が地域の母親となり仕事を続けてきた。
３人の息子がいるただのおばちゃんです（本人談）

参加費：5000円（宿泊費・食費）＊洗面用具・寝巻は各自ご持参下さい

2016年対話集会　申込書

名　前		
住　所	〒	
連絡先	TEL	FAX
	E-mail	

申込締切は8月末です。

連絡先：カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター　　TEL・FAX　075-223-2291
京都市中京区河原町三条上る　カトリック会館7F